

愛知大学の『源氏物語』関連古典籍

～『絵入源氏物語』(初版)と「花宴」詠歌(美石短冊)を中心に～

文学部教授 和田 明美

『源氏物語』は今を遡ること約千年、紫式部によって書かれた長編の物語である。加えて795首の歌や千首を超える引歌が重層的に綾なす歌物語でもある。平安時代の日本文化や王朝貴族の恋物語に惹かれて、『源氏物語』を紐解く読者も少なくない。豊かで細やかな物語の表現は、難解と言われながらも今日まで多くの読者を魅了してきた。

『源氏物語』の言葉の特色は、¹延べ語数約20万語・異なり語数約1万語からなる語彙の豊富さにある。殊に、紫式部によって新たに作り出された語は物語の独自性を支え、『源氏物語』以前に使用された語も、使用対象の拡大や場面の多様化により表現内容が豊かになっている。『源氏物語』の文章の随所に息づく作者紫式部の深い洞察力や美意識の背後には、平安貴族社会の自然観や価値観がある。作品は、4代の天皇の治世約70年余、藤原氏全盛期の摂関政治の下で生じた事件と史実に依拠しつつ、臣籍に下った貴公子・光源氏の一生と行く末(次世代)を描いている。とりわけ、妻妾婚制度の軋轢に苦悩しながら嘆くより他なかった女性たちの心をリアルに表しているのである。

愛知大学が所蔵する『源氏物語』関連の蔵書は研究書・注釈書・解説書・梗概書・辞典(事典)・絵画、さらには複製の絵巻および写本等多岐にわたり、貴重な古典籍や文物も少なくない。また国際化時代の多言語共生・多文化共生の要請に応えるべく、英語・フランス語・ドイツ語・中国語等による多様な翻訳や解説書も蔵している。愛知大学には漢籍とともに和書を取める文庫があり、『源氏物語』関連の書物が諸

種存在する。ここでは、特に²松坂家旧蔵と³菅沼家旧蔵の版本を中心に紹介する。

松坂家旧蔵のものとしては、最初の絵入り版本『絵入源氏物語』(慶安3(1650)年版)があげられる。20冊に合冊されており、「慶安三仲冬蓬衡叢品山氏春正謹跋」との跋文を持ち『慶安本』とも称される。『絵入源氏物語』には、蒔絵師で歌人の山本春正(1610～1682年)によると目される226枚の絵が挿入されている。これらの挿絵は勿論のこと、『絵入源氏物語』が後世の版本に与えた影響は大きい。松坂家旧蔵の大部分の外題(左)は張り替えられているなかで、「わかかな下」には本来の外題(中央)が残っている。慶安3年版『絵入源氏物語』(初版)は、付録として『源氏物語引歌』『山路の露』『源氏目案』『源氏系図』を納めているが、松坂家旧蔵(愛知大学図書館蔵)は『源氏系図』を欠いている。

菅沼家旧蔵のものとしては『玉の小櫛』がある(愛知大学図書館菅沼文庫)。「玉の小櫛」は本居宣長(1730～1801)が著した注釈書であるが(寛政8(1796)年成立)、みずからの言葉の研究に依拠しつつ旧注の誤りを正し儒教や仏教的思想を排した、当時としては斬新な注釈書であった。巻1～巻4は「すべての物語書の事」をはじめとする各論で、巻1を受けた巻2では「もののあはれ」論を展開している。殊に巻1巻2巻は、宝暦13(1763)年に成立した『紫文要領』(上下2巻)を改定したものである。「湖月抄の誤り」を是正することを旨とする語釈・注釈は、巻5以下巻9までとなっている。菅沼文庫本は全9巻揃いの版本で、外題の「⁴玉の



松坂家旧蔵 絵入源氏物語



菅沼家旧蔵 玉の小櫛

小櫛」は宣長が書名の由来を詠じた巻1冒頭の「そのかみのこゝろたづねてみだれたるすぢときわくる玉のをぐし」そ」と一致する。

さて、愛知大学総合郷土研究所には、^{はなのえん}「花宴」の巻をもとに詠じた中山美石の短冊がある。^{うまし}三河吉田藩主中山美石(1775～1843年)は、国学者であるとともに歌人でもある。また、上代特殊仮名遣いに関する『仮名遣奥山路』を著した石塚龍麿(1764～1823年)らとも友好があった。1817年に藩校時習館教授となり、1819年には藩主松平信順に『源氏物語』の「桐壺」の巻を進講した。著書に『後撰集新抄』(外題表記)20巻があり、鈴木朗の『少女巻抄註』にも本居大

平に続いて跋文を寄せている。「源氏物語のいひしらすめてたき事はさらにいふへくもあらず…今かくなれるかうれしきにもたへすてなむ 三河国 中山美石」(をとめの巻抄注跋)。美石の「花宴巻」短冊の歌は次の通りである(上段翻刻)。

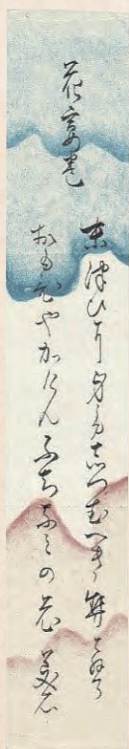
末つひに身もしつむへき契とは おもひやか
けんふちなみの花

〔末つひに身も沈むべき契とは 思ひやか
けん藤波の花〕

「花宴」は『源氏物語』54帖中8帖の巻名で、本文の「南殿の桜の宴せさせたまふ」に由来する。「花宴」の巻は桜と藤の二つの宴をモチーフにしつつ、藤壺への思いを背景に源氏と朧月夜との禁断の恋を描いている。宮中での桜の宴のあと、源氏は抑えがたい藤壺への思いから出歩く。しかし、藤壺への取次の戸口は閉ざされていた。弘徽殿方に忍び入ると、「朧月夜に似るものぞなき」と口ずさむ女と出会う。女は相手が源氏で

あると知り、怯えながらも拒みはしなかった。名を告げることもなく「艶になまめきたる」様子で「うき身世に…草の原をば問はじとや思ふ」と詠み、源氏も「いづれぞと…小篋が原に風もこそ吹け」と返す。その女は東宮への入内が約束された右大臣家の六の君・朧月夜であった。その後、右大臣家での藤の宴に招かれた源氏は、藤壺に思いを馳せつつこの女との再会を果たす。美石の短冊の歌は、右大臣家での藤の宴に招かれた源氏が、「藤」の花に寄せて藤壺を思いつつ朧月夜と密会する場面の物語表現や禁断の恋の行く末を詠んでいる。しかも、朧月夜と秘かに契った時の源氏の歌「深き世のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ」を踏まえている。『源氏物語』への造詣が深い歌人美石の、「花宴」の巻のテーマを読み解いた一首と言えよう。

さらに、三河吉田藩主家と『源氏物語』は深い関係にある。令和元(2019)年に定家本「若紫」の巻の写本が発見されたことで、三河は『源氏物語』の「若紫」本文ゆかりの地として脚光を浴びることとなった。定家本については、これまで「花散里」「行幸」「柏木」「早蕨」の存在が確認されていたが、新たに三河藩主家大河内元冬氏蔵『源氏物語』第5帖「若紫」が加わったのである。⁷平仮名の使い方などから、定家晩年に近い本」とされ、「題箋の筆跡」や「料紙」も他の4巻と同一であることが明らかにされた。



八木書店『定家本 源氏物語 若紫』より

現在、紫式部によって書かれた『源氏物語』原本は存在しない。『紫式部日記』によると、寛弘5(1008)年11月に「若紫」の巻あたりまで書かれており、「源氏の物語」と称されていたようである。また、当時存在した草稿本・改稿本に加えて豪華な美装本制作の過程も推察される。「御冊子づくりいとなませ給ふとて…色々の紙選りととのへて、物語の本ども(原本)そへつつ、所々にふみ書きくぼる。かつは、綴ぢ集めしたたむるを役にて明かし暮らす」(紫式部日記)。『源氏物語』は、中世まで人の手により書写された写本、近世に入ると主として版本により継承され読まれてきた。その間、誤写や加筆・改変・改竄もしくは脱落等により、本来の本文とは様相を異にするものが存在するようになった。現存諸本は3系統に分類され、藤原定家が証本と定めた「青表紙本」(1225年頃)の系統、源光行・親行父子による21種類の写本の校合本である「河内本」(1236年頃)の系統、それらのいずれにも属さない「別本」(前二系統の混成本と改竄本含む)からなる。青表紙本の由来は定家本の表紙の色によるもので、今日の『源氏物語』本文の底本は青表紙本系統の「大島本」が主流である。

昨今の国際化時代の『源氏物語』は、100カ国を超える国々の言語に翻訳され、国境を越え千年の時を経て世界の人々に親しまれている。日本国内でも平安末期から現代に至るまで、数々の注釈書や梗概書が刊行され読み継がれてきた。周知のように『源氏物語』は、平安時代の絵画化・やまと絵隆盛の潮流に乗りながら、成立後まもなく絵画化されはじめる。ビジュアルな『国宝 源氏物語絵巻』等の源氏絵や今日のメディア領域における漫画・アニメ・映画・舞台・音楽における『源氏物語』の新たな試みは、国境を越え世代を跨いで多くの人々の関心を呼んでいる。わけても2024年NHK大河ドラマ「光る君へ」は、物語受容史に新たな1ページを加えようとしている。紫式部をモデルに道長にもスポットを当て、和歌や漢詩を織りなしつつ『源氏物語』の特色あるシーンを揺曳させている。その映像は、現代メディア領域に古式ゆかしき「光る君へ」新風を吹き込んでいる。

すでに宣長が『玉の小櫛』のなかで指摘したように、「螢」の巻の「日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しく詳しきことはあらめ」には、作者の歴史認識や物語観があらわれている。従前の「作り物語」を超えるべく、歴史的



紫式部日記絵巻断簡 東京国立博物館蔵
出典:ColBase (URL:<https://colbase.nich.go.jp>)

な実在性に基づくリアリティーを探求した紫式部の試みは、「桐壺」の巻の冒頭文「いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとな際はにはあらぬがすぐれて時めきたまふありけり」からも読み取ることができる。『源氏物語』には、亭子の院・宇多の帝・延喜の帝や在原業平・紀貫之・小野道風等が登場し、醍醐・朱雀・村上天皇時代の人物が描かれている。「昔男〜」「昔〜ありけり」型の昔物語を超越する創造への意思と思惟が、『伊勢集』の先蹤を超える歴史的な実在性を内包する物語冒頭表現の創出を可能にしたとも言えよう。その一方で、『源氏物語』が千年前の古代信仰や自然観を含み持つことも事実である。両者兼備のカオスの特性と平安貴族文化に基づく表現、人間のありようを見据えつつ和歌と中国(唐)の文化を汲み尽くし受容・変容した作品こそが、世界に誇る古代的な文学遺産『源氏物語』の魅力ではないだろうか。

注

- 宮島達夫他編『日本古典対照分類語彙表』笠間書院・2014年ならびに宮島達夫編『古典対照語彙表』笠間書院・1971年による(正確には述べ語数207808語、異なり語数11423語)。
- 三河吉田藩御用達松坂家の旧蔵本で、現在愛知大学図書館蔵。『絵入源氏物語』については、清水婦久子『源氏物語版本の研究』和泉書院・2003年。ならびに荒木亮子「松坂家旧蔵絵入源氏物語」早川駿治「松坂家旧蔵源氏物語引歌」(愛知大学総合郷土研究所『源氏物語のゆかり展図録』2024年)。
- 三河国八名郡乗本村で近世初期以来回漕業を営み産を築いた菅沼家の旧蔵本で、現在愛知大学図書館蔵 菅沼文庫。沢井耐三「菅沼文庫本の和古書」(『韋編』12号・愛知大学図書館・1995年)、ならびに田中博久「菅沼家旧蔵 玉の小櫛」(同上図録・2024年)。
- 本居宣長『源氏物語玉の小櫛』(『本居宣長全集 11巻』筑摩書房・1969年)。国立国会図書館蔵『源氏鈴の音色』(巻3・巻4を欠く伝本)など「玉の小櫛」の外題を持たない伝本もある。国書データベースには『源氏物語玉の小櫛』(9巻9冊、寛政8年成、同11年刊)とあり、別書名を「玉の小櫛」とする。
- 中山美石の『源氏物語』関連の業績については、「少女巻抄註」(伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』東京堂出版・2001年)他。三河藩士としての活動は、荒木亮子「中山美石和歌短冊」(同上図録・2024年)。
- 『後撰新抄』は『後撰和歌集』の注釈書。20巻別記1巻からなり、文化9(1812)年成立、文化11(1814)年刊。版本は14巻・別記1巻。国書データベースの統一書名は『後撰集新抄』、別書名を『後撰新抄』『後撰和歌集新抄』とする。
- 藤本孝一「定家本源氏物語『若紫』解題」(大河内元冬・藤本孝一『定家本 源氏物語 若紫』八木書店・2020年)、新見哲彦「新出『若紫』巻の本文と巻末付載「奥入」」(『中古文学』第106号・2020年)、工藤重矩「源氏物語若紫巻の本文」(同上第109号・2022年)、齋藤鉄也「定家監督書写四半本『源氏物語』の年代推定」(同上第112号・2023年)。大河内家の由来については、橘敏大「大河内松平家所蔵定家本源氏物語 若紫」(同上図録・2024年)。
- 山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈 一』風間書房・1999年。

[付記]愛知大学図書館蔵の古典籍の写真は、本学文学部上田謙太郎准教授が撮影したものである。